伝統文化を引き継ぐイタリアの初等科音楽教育における一考察
―― 美しい響きのある歌唱表現指導法に視点をおいて ――

A Study on Primary Music Education of Italy Inheriting Traditional Culture :
From the Point of the Teaching Singing Expression with Beautiful Sounding

木下 紀章，瀧明 知惠子

KINOSHITA Noriaki, TAKIAKI Chieko

武庫川女子大学大学院 教育学研究論集

第 16 号　2021 年

武庫川女子大学大学院 教育学研究論集 第16号 2021

【研究ノート】

伝統文化を引き継ぐイタリアの初等科音楽教育における一考察

―― 美しい響きのある歌唱表現指導法に視点をおいて ――

A Study on Primary Music Education of Italy Inheriting Traditional Culture :

From the Point of the Teaching Singing Expression with Beautiful Sounding

木下紀章*　瀧明知惠子**

KINOSHITA Noriaki*　TAKIAKI Chieko**

Abstract :

In this paper, we focus on "how to convey beautiful vocal sounds" in elementary music education. We learn from Italian music education activities that inherit the "singing method" of traditional arts and culture, And we examine how Italian society as a whole respects and inherits traditional culture.In addition, we examine "what is sound" and "what is beautiful sound" from an acoustic point of view. By developing a teaching method for "singing expression with beautiful sounding", it will be an opportunity to create better lessons in Japanese elementary music education.

Keywords : Elementary music education of Italy，Out-of-school education，　Singing instruction, Bell Kant vocalization method,

１．はじめに

歌を歌うことから言葉ははじまったと言われている。歌い合うことで仲よくなれる，つまり歌はコミュニケーションの基礎とも言えるのである。音楽は一生の友となり，知れば知るほど楽しみが深くなるなど，生涯学習につながっていくのである。

2018 年 10 月より，芸術強化に関わる事務が文部科学省から文化庁に移管された。それによって，乳幼児，児童・生徒から高齢者にいたるまで，あらゆる世代の文化・芸術活動・教育に対して，文化庁が支援し推進することとなった。音楽教育においてこれまで以上に生涯にわたっての学びという視点が大切になるとともに，音楽教育実践の新たな基礎づくりが強く求められている。

新学習指導要領が本年度より，小学校・中学校・高等学校，と順次実施される。学力向上ということで英語・数学・理科が重視されている。そういった中で人間教育の基盤であり，豊かな心の醸成を担う音楽をはじめとした芸術教育が，必修教科であり続けている意義を再確認したい。

新教育課程では，知っていることを活用して，「何ができるようになるか」を意識した活動が求められている。各教科で育成されるもの，教科等ならではの見方・考え方など教科の本質にかかわるものや，教科等固有の個別の知識やスキルに関するもの，といった視点が重視されているのである。「教科等の本質にかかわるもの」を考えていくとき，子どもたちが「身に着けているもの」を土台に「何を，どのように身に着けるか」の研究実践を深めていく契機となる。

瀧明はこれまでイタリアの音楽科教育について調査研究してきた。ベルカント唱法の発祥地であり脈々と受け継がれている音楽文化に満たされたイタリアにおいて，ローマの幼・小・中学校の一体型学校であるピステッリ校での授業参観・交流授業，およびボローニャ大学，マルティーニ音楽院での研究調査・研究交流を行ってきた。[1)]

木下はウィーン国立音楽大学大学院ポストグラデゥエート声楽科で声楽実技・コレペティ・ドイツ語発音を学び研究を積み重ねるとともに，ローマやパルマ（イタリア）において様々な声楽教師に師事してきた。また，ウィーンのヒンベルク教会，マリアランツェンドルフ教会，クロスターノイブルク教会などで，ソリストとして多くのミサや復活祭を務めてきた。

歴史的に西欧の音楽文化の中心であったイタリアでは，どのように歌唱・合唱をはじめとする音楽科教育に取り組んでいるのか。イタリアと日本の学校音楽科教育の比較を通して示唆を導き出すことを課題としてきた。

歌唱は，人間に等しく与えられた声帯という楽器で奏でる。人間の声帯は素晴らしい楽器である。歌うための健康管理から楽器作りまでを正しく行えば，美しく響きある歌唱表現の基盤づくりができるのである。限られた授業時間の中で，日本の歌唱や合唱指導は，活発に行わ

＊ 京都市立芸術大学（Kyoto City University of Arts）　＊＊ 奈良学園大学（Nara-Gakuen University）

れているが呼吸法や発声法の基本的な指導法については未だ確立されているとは言えない。

昨今，国内外で教育における学校と地域連携に関する議論が盛んになっている。イタリア公教育は学校外の教育機会が豊富であると言われている。1970 年代，教育機会の多元性を擁護する「教育のポリセントリズム」が興隆し，[2] 学校外教育は正規のカリキュラムに組み込まれている。[3]

2012 年版の「国のカリキュラム指針」[4] は，一般目的にキーコンピテンシーをそのまま採用し，第 1 章第 1 節に今日の学校が置かれた状況と学校の役割を端的に示している。その冒頭においては「学校の置かれた環境は，いよいよ文化的な刺激にあふれると同時に，ますます多くの矛盾に充ちている。そうした中にあって，今日，学校での学びは子どもや若者が生きている多くの人間形成に関わる経験のうちの一つに過ぎず，また特定のコンピテンシーを獲得するのにしばしば学校の環境は必要ない。しかしまさにこのことのために，学校は，児童・生徒が多様な経験に意味をみいだす力を身に着け，人生そのものが断片化した出来事の寄せ集めに成り果てるリスクを軽減するための役割を軽んじるわけにはいかない。」（下線は筆者による）と示しているのである。学校と学校外教育の連携を重要視しているのである。音楽教育においても然りである。そこで，地域社会や地域の大学と連携し，どのように伝統的な音楽文化を引き継ぎ，創造性や主体性を育む教育が展開されているのか考察を進めた。これまで，ローマの公立小・中学校との研究交流において歌唱を始めとする初等科音楽教育において示唆を受けている。さらにボローニャ市を訪れ世界最古といわれるボローニャ大学，およびボローニャ音楽院“ジョバンニ・バッティスタ・マルティーニ”での調査研究を通して考察する。

ボローニャ市はイタリア北部に位置し，中世から商業や学術が盛んであり，国内有数の文化都市へと発展している。「創造都市」発祥の地と言われ，ユネスコの「創造都市」ネットワークの音楽分野加盟都市である。ボローニャ大学および，ボローニャ音楽院“ジョバンニ・バッティスタ・マルティーニ”において音楽教育の現状を視察するとともに，現在も研究交流を行っている。

本論文では，初等科音楽教育における「声楽的美しい響きの伝え方」に注目する。伝統芸術文化と言える「歌声」について，歴史的に脈々と受け継ぐイタリアの音楽教育活動から示唆を受けるとともに，「響きとは」「美しい響きとは」について音響学的見地から考察し，「美しい響きのある歌唱」に導く指導法を開発することにより，日本の初等科音楽教育における，より良い授業を創造する機会としていきたい。

２．イタリアの学校教育と音楽

（１）日本とイタリアの教育制度

イタリアの学校制度は，日本が 6—3—3—4 制であるのに対し，5－3－＊5－＊3 制である。（＊では，専攻によっては修学年数が必ずしもこの通りとは限らない。）学期制度は，主に日本では 3 学期制だが，2 学期制をとっており，年度は，9 月～6 月となっている。教育委員会・教育担当として，日本の文部科学省・各都道府県教育委員会にあたるイタリアの行政機関は，教育・大学・研究省（初等～中等教育管轄部 - 旧教育省」）（高等教育管轄部 - 旧「大学・研究省」）である。

日本の義務教育は，では，小学校 6 年（7 歳～13 歳），中学校 3 年（13 歳～16 歳）であるが，イタリアでは，教育体系は大きく 2 つの課程（サイクル）に分けられている。第 1 課程には初等学校（Scuola Primaria，5 年）と前期中等学校（Scuola Secondaria di Primo Grado，中等学校相当，3 年）が，第 2 課程には後期中等学校（Scuola Secondaria di Secondo Grado，高等学校相当，4～5 年）が属している。なお，第 2 課程の後期中等学校には，文系／理系普通高校，芸術高校，技術学校（専門養成学校）等があり，専攻体系により修学年数が異なる。第 1 課程は全課程を通じて義務教育，第 2 課程については最初の 2 年が義務教育として定められている。ただし，教育権保護の観点から，「権利・義務」教育という拡大概念が論じられるようになってきており，全ての児童・学生が 18 歳までに卒業・修了等の資格を得られるよう広く教育の機会均等化を図ることを指針としている。教育政策においては，以前は国が各学年の指導内容を詳細に示していたが，現在は概要を示し，何年生で何を教えるかは各学校の裁量であり，達成度においても各学校が診断するようになっている。[3]

イタリアのカリキュラムにおいては，初等学校は，週当たりの授業時間数には，24 時間，27 時間，30 時間，40 時間の 4 つの選択肢があり，入学手続き時に希望時間数を申請するようになっている。前期中等学校の週当たりの授業時間数には，30 時間または 36 時間（最高 40 時間まで延長可能）があり，入学手続き時に希望時間数を申請する。1 クラスは 23 名～25 名である。通常，文書化された校則や制服はなく，子供の自主性に任されている。

イタリアでは日本の学習指導要領に相当するものとして，教育省（現教育大学研究省）による「幼児教育と初等教育のための国のカリキュラム指針」（幼稚園，小学校，中学校）がある。このカリキュラム指針を基盤とした教育がなされているが，学校の裁量の幅が大きくなっている。

「幼児教育と初等教育のための国のカリキュラム指針」
2012 年 9 月版　教育省

文化，学校，人
・新たな局面における学校
・一人一人の中心性
・新たなシチズンシップのために
・新たなヒューマニズムのために

一般目的
・学校，憲法，ヨーロッパ
・生徒のプロフィール（修了時に到達していることが望ましい生徒像）

カリキュラムのオーガナイズ
・指針からカリキュラムへ
・領域と各教科
・カリキュラムの継続と統一性
・諸能力の発達のための中間目標
・学びの諸目的
・評価
・諸能力の認定
・みんなの，そして一人一人の学校
教育コミュニティ，専門的コミュニティ，シチズンシップ　5)

＊各学校はこのカリキュラムをベースに運営するが，それ以外に学校自身のカリキュラム（Piani di Offerta Formativa「育成提供プラン」：音楽，演劇，運動活動など）を製作することで，カリキュラムをより豊かにし，特徴を加えている。

３．イタリアの音楽科教育

～ボローニャ大学・ボローニャ音楽院“ジョバンニ・バッティスタ・マルティーニ”との研究交流から～

（１）実践調査の概要

瀧明はボローニャ大学及び，ボローニャ音楽院“ジョバンニ・バッティスタ・マルティーニ”，と研究交流を行っており，訪問日は 2017 年 9 月である。訪問目的は①ボローニャ大学，ボローニャ音楽院の施設・設備（レッスン室，コンサートホール等）の視察，呼吸法・発声法・歌唱指導を中心とする個人レッスンの参観，②呼吸法・発声法・歌唱指導を始めとする音楽科教育についてや教員養成の在り方についての研究交流，資料収集。である。主な対応者はボローニャ大学教育学部，バドラート教授（Nicora Badolato），ボローニャ音楽院ピアノ専攻所属，デリュ教授（R.Deriu），である。

（２）教員養成から見る音楽科教育

ボローニャでの調査研究において，イタリアの教員養成のあり方をボローニャ大学教育学部及び，ボローニャ音楽院から資料提供を受けるとともに，聞き取り調査を行うことができた。

教育制度において，2000 年までは大学卒業（3 年）と同時に教師になる資格を取得できたが，2000 年以降，大学卒業（3 年）後，教師になるための 2 年コースに進む。小学校教育課程では音楽コース 60 時間は選択であり，受講しない学生もいる。その後の 2 年研修は，教育学，心理学，合唱，プラス実習であり，有料である。（1 年約 2,000 ユーロ）中学校教育課程では器楽については音楽院３年，あるいはそれに準ずる専門の学びが必要である。小学校教員採用テストには音楽は含まれておらず，中・高等学校採用試験では，音楽専門のテストがある。2015 年に教育関連のモデルができており，大学（教育学部）3 年プラス 2 年，24 単位となっている。教員養成 3 年と専門課程 1 年目は理論，2 年目は実習・インターンとなっている。また，教育現場に入ると，専門のソロ練習をしてきたことが教室では役にたたないといった現状があり，新しい法律で，これまでは本人に任されていた研修を定期的に行うようになっている。

イタリアでは伝統的に国として，音楽教育に力を入れており，クラッシック，ジャズ，電子音楽等，子どもの時から学べる音楽教室が多くある。音楽の高等専門学校であるコンセルヴァトーリオ（国立音楽院）は 1930 年ころ，パリの音楽院をモデルとして創設される。現在は小さいところを含めると 70 校あり，各国の学生が専門の力を磨くため留学している。ボローニャ音楽院のデリュ教授は，コンセルヴァトーリオの現況について以下のように語った。

本音楽院では 700 名中，40 名が小・中・高校生であり，大半が大学生の比較的大規模の音楽院である。専任の教師は，大学生をメインに教えており，外部講師が子ども達を教えている。音楽院の授業は，個人指導，中学音楽専門クラスがあり，小・中学生はそのままのカリキュラムでは無理があるため変更し，成長に応じて行っている。コンセルヴァトーリオは地域の講座ももっており，ソルフェージュ・合唱，オーケストラなど，これまで大人が対象であったが，最近は小さい子ども達も入れている。現在は，伝統的に優れた専門的音楽指導を行い，音楽性豊かな学生を育成している音楽院を，学生の将来のためにも大学にしていこうと働きかけているとのことであった。

また，指導法については，小学校では低学年から，「よく聴かせるようにし，どならせないよう配慮して指導する。『聴く』ということに重点をおいた指導」である。子供たちの地声（胸声）は，特に発声を教えこもうとせず，教師が歌って聴かせ自然に学ばせている。中学では音楽の授業で合唱は行わず，クラブや教室で合唱を楽しんでいる。かつての授業ではオペラや歌唱中心であったが，現在はリコーダーとキーボードが中心になっている。

一方，ボローニャ大学のバドラート教授によると，公

立小学校では CD デッキ，ピアノなどが整備されていないといった教育環境であり，音楽の授業は機能していない学校が少なくない。関心の高い学校は予算の範囲でワークショップや音楽博物館を計画しており，大学がコーディネーターとなって，音楽科授業も行っている。学生が教育プランをつくり，実際に指導したり，コンサートのプロジェクトも計画し実践しているのである。また，オーケストラ部員が生徒と一緒にコンサートを行い，地域のホールで保護者や地域の人々を招き，成果の披露なども行っている。さらに音楽教育学部では教師の指導研修や大学生の無料のコンサートも実施している。

（２）大学・音楽院における音楽科教育の現況

日本では小・中学校共，音楽科教育は義務であるが，イタリアでは中学校（週 2 時間）のみであり，小学校，高校の音楽教育は義務ではない。小学校では音楽の専門知識がない教師が教えており，共通で学ぶものは少なくシステム化されておらず，自由度が高い。

学校によっては保護者からもっと学ばせて欲しいという要望があり，音楽の加配授業をしているところもある。音楽教諭には，学校が費用を出す。基礎力をつける時間は学校差があり，中学まで音楽を聴く機会は少なく，音楽史も中学校で少し学ぶ程度である。

（３）イタリアの学校外教育との連携

～オペラプロジェクト～

民間団体の企画するオペラの鑑賞プログラムでは，行政の補助と民間団体の寄付を募ることで，より多くの市民に，手ごろな価格でオペラを鑑賞できるようにしている。昼の公演は授業の一環として活用したり，夜の部は家族で見学できるよう工夫したりする仕組みが確立されている。

瀧明が 2014 年から 2019 年に渡って音楽教育研究交流を行ってきたローマのピステッリ小学校（Scuola Primaria "Ermenegildo Pistelli"Monte Zebio 33, Roma）（幼・小・中学校の一体型学校）における「オペラプロジェクト」の実践例は以下の通りである。

調査方法は，授業の視察，資料収集，クリスティーナ・ダミーコ（Cristina D'Amico）音楽担当教諭を中心とする担当教諭からの聞き取り調査であり，実施は 2016 年 9 月である。

年度当初（9 月）に＜学校でオペラを学び，オペラ歌手とともに歌いませんか？＞といった見出しで，資料が各学校園に配布される。[6]（他に，各種コンサート，演劇，美術鑑賞などのプロジェクトがある）「椿姫」「魔笛」「セビリアの理髪師」「リゴレット」，その他の多くの作品から，ドラマの主人公の魅力を発見し，音楽体験することができるようになっている。各学校園が，「オペラプロジェクト」（年間 18 ユーロ程度）を選択するとオペラの歴史やオペラアリアについて学ぶためのプロジェクトが計画される。構成は①教師のためのセミナー，②生徒ためのワークショップ③劇場でのコンサート，となっている。発声のトレーニングや歌唱技術，芸術面など，教師と生徒が最終的なオペラ上演を目指して，音楽監督率いるオペラの創造に誰もが積極的に参加できるワークショップである。

＜取り組みの流れ＞

学校では新学期（9 月）に向けて，7 月に学校と地域の専門家が連携した活動（各種コンサート，演劇，美術鑑賞など）についての検討会が行われ，諸団体の日程が配布される。無料や有料があり，様々なプログラムから予算の中で学校としての方針を決定する。プログラムの中には費用を保護者が負担するものもあるため，年度初めに，学校が進めたいプロジェクトの資料を保護者に案内し，理解を深めてもらった上で「オペラプロジェクト」実施の有無を保護者の判断にゆだねる学校もある。クリスティーナ・ダミーコ（Cristina D'Amico）音楽担当教諭によれば，ある学校では 1 名でも反対があれば，そのクラスは行わないということであった。親の判断が一致すれば実施されるのである。決定すると，楽曲の CD と教科書 [7]，楽譜，カラオケ，DVD の配布がある。これらの教材は，学校の状況に応じて，創作・編曲され，より子どもたちに見合った魅力ある教材に工夫されている。学習プロセスは，次の 3 つのレベルに分かれている。

①　教員用の研修会：教員のためのワークショップ（２・３回）

プロジェクトのメンバーである音楽専門家による，小学校の担当教員向けである基本的な理解事項の講義（オペラの歴史，物語の内容，アリアや合唱など）と子ども達の指導法（発声，歌唱法，合唱）について研修が行われる。担当教員はその機会にしっかり学び，夏季休暇中にオペラ鑑賞に行くなどより理解を深めておく。短期間ではあるが，日常子ども達に接している指導者が，歌唱法の基本を理解し，体得していくことを大事にしている。

②　生徒のための学校でのワークショップ

オペラ歌手と音楽の専門家が学校へ指導に訪れる。1 時間の授業を 2・3 回実施する。初回はオペラについての話と発声・歌唱指導を行う。オペラ歌手が発声の基本を指導するのである。2・3 回は，歌唱・コーラス指導，パフォーマンス指導を行う。他の時間（5・6 時間）は学校で，子どもたちは担当教員とともに，専門家に指導を受けてきたことをベースに，CD や教材を活用して発声やコーラス，パフォーマンスの練習を行う。教員は研修で学んだことを活かし指導に当たるのである。

③　すべての参加者を結集したワークショップ・劇場でのオペラ上演

仕上げとして，約 80 分のオペラ上演会がある。地域の劇場で学んだ成果を音楽会形式で発表し，専門家（オペ

ラ歌手・オーケストラ団員）とともに演奏に参加する。家族が鑑賞に訪れ，劇場でともに音楽を楽しめるようになっている。ほとんどの保護者が大変熱心で，参観に訪れるのである。地域によっては，これらの取り組みを複数校で行い，研修や，生徒のワークショップ，劇場でのオペラ上演まで，大人数で行う所もある。

４．初等音楽教育における声楽的美しい響きの伝え方

（１）響きとは何か

初等科音楽教育における「美しい響きのある発声」の指導法について考察する。三省堂　大辞林第三版によると，「響きとは」について 1，音や声が広く周囲に伝わって聞こえること。また，その音や声。2，音が物にぶつかり，跳ね返ること。3，発音体が振動をやめた後まで残る音。残響。余韻。4，その音を聞いた時の感じ。5，伝わってくる振動。と記されている。音響学的に人間の聞こえる周波数というものはおおよそ低い音は 20Hz で高い音は 20,000Hz と言われている。初等科音楽教育では，まず 3 つの響きを注目していく。

1　響きとは何か？
2　美しい響きとは何か？
3　美しい響きはどんなものがあるのか？

新学習指導要領の音楽科指導における「音楽経験と思考」について，実践研究を深めていくために，以下のような指導を行っていく。

例）

1　響きってなんだろう？
　お寺の鐘，船の汽笛，ピアノの音色，トンネルの中，やまびこ，など

2　美しい響きはどういうこどだろう？
　聴き心地がいい，心の中に留まる，癒されるなど

3　美しいものの響きはどんなものがある？
　楽器の音色，人間の声，川のせせらぎ，鐘の音，など，

以上を児童たちと共通認識として確認し，それを基に歌うことにおいての「美しい響きとはどのようなものであり，そしてその響きはどのようにして作るのか。」という課題を初等教育から成長段階に応じて指導していくことにより芸術的美意識を育む。そして芸術的美意識は人格形成において重要な役割を果たす一つと考えられる。

以上の 3 つを伝えた上で，次に「歌声の美しい響きってどんなだろう？」へと進めていく。

（２）美しい響きとは

それぞれ育つ環境は十人十色である。元気に歌うことが美しいという児童もいれば，丁寧に歌うことが美しいという児童もいるだろう。実際「美しい」にもいろいろあり，その様々な美しいをまずは児童に自分で考えさせる。そして教師はたくさんの「美しい」を児童と一緒になって考える。

「美しい」（ポジティブ）を表現するにあたり，反対語「醜い」（ネガティブ）表現についても考えさせ，さらに思考の幅を広げたい。

ポジティブ・・・歓喜，嬉しい，楽しい，希望，等
ネガティブ・・・苦痛，苦悩，悲劇，逃亡，等
どちらにも取れる表現・・・ワクワク，ドキドキ，ソワソワ等

「美しい響きとは？」一人一人生まれ育った生活環境などにより，それぞれ美しいと感じるものは好みがあり，不快に感じる音でも人によっては美しく感じるということもあり，一概に美しい響きの概念というものはない。すべての人に美しい響きの定義を伝えるのは非常に難しいことである。しかし音響学的に見ると人間の好む音というものはあるようだ。

近年ヒーリングミュージック，また音楽療法の領域では「ソルフェジオ周波数」「528Hz」などという言葉が使われる。「ソルフェジオ」とはフランス語で音階を意味していて「ソルフェジオ周波数」とは 528Hz をはじめとする特定の周波数の音階を指し，現在あるドレミファソラシドの音階とは多少異なっていて，７種類の特定の周波数の音から構成される。

528Hz とは 1 秒間に 528 回空気振動することで音波として認識される。1 秒間に空気の振動する回数を表したものの単位を Hz（ヘルツ）と呼び，数値が大きくなると高い音，その反対に小さくなると低い音となる。528Hz はソルフェジオ周波数の中でも，基本となる周波数で「奇跡の周波数」ともいわれている。ストレス過多の生活により傷ついたりした細胞の DNA を修復するともいわれている。具体的にどのようなことなのかというと 528Hz を含む音楽を聴くと人間の意思とは無関係に働く自律神経の中でも脳や体を安らぎ状態に導く副交感神経にスイッチが入るため，身体が安らぐことが医学研究からわかっている。また 528Hz はピアノの鍵盤の中央の C より半音高いドの♯（cis）の音である。

基本的科学的な根拠は現在ないが，ある音を浴びて（聴いて）体の不調などを整えるというスピリチャルは，音楽療法の分野で近年取り扱われている。

DNA 研究者のレオナルド・ホロヴィッツ博士がソルフェジオ周波数の 528Hz を聴くと DNA を修復できるという研究論文を発表し注目を集めた。地球の磁場が約 8Hz なのでその 66 倍が 528HZ ということは分かっているが，それと「癒し」に直接的因果関係は現在解明されていない。

ソルフェジオ周波数は，その他，安定の周波数「174Hz」（1 番低く，意識拡大と進化の基礎であり，心を落ち着か

せ安定に導くといわれている。声を出して音を共鳴させることで，さらに落ち着いた気分が広がる。心が落ち着くと自分の軸や存在をしっかりと認めることができ，一歩踏みだす勇気を抱くことができる。）や促進の周波数「285Hz」（多次元領域からの意識の拡大を促すという，スピリチュアル性の高い周波数と言われている。心の安定をより強固なものにするために，自然治癒力を促し心身を整えるといわれている。），解放の周波数「396Hz」（罪の意識や，トラウマ，恐怖心，不安の感情を緩和させるといわれている。心に染み入るような情緒的なメロディーが特徴である。感情に働きかけ，自己の解放を促し，聴いた後に心も体も軽く感じさせてくれる。）他，がある。[8)]

（３）声楽的美しい響きの伝え方

～木下の受けたレッスンやトレーニングの体験から～

声楽の領域ではベルカントという言葉がある。イタリア語であり，もともと美しい（自然な）歌と日本語で訳されたりするが，ベルカントにおいて重要な音色の特徴というものがある。それは響きが「明るい」「丸い」「柔らかい」という 3 つの特徴である。これを低音から高音までの音域で歌うことが基本であり，一つでも欠けてしまうとベルカントとは言えなくなる。クラシックの声楽家はこれを基に日々訓練している。

もう一つ，ベルカントと同じく重要な要素がレガート唱法である。レガートとはイタリア語であるが，日本語では「結ぶ」，「繋ぐ」などと訳すが，音楽用語では音と音を滑らかに繋ぐという意味で使われる。声楽でレガートは有声子音，無声子音があり非常に高度な技術の一つである。歌には歌詞があり，言葉を発するので母音だけでなく多くの子音も同事に発音しなければならない。また p,k,t.の無声子音があることは，よりレガートで歌うことを困難にしている。

木下はウィーンに留学中，多くの声楽教師のレッスンを聴講し，受講してきた。また声楽の教師だけでなくコレペティのレッスンも数多く受講した。日本では音楽教師の一言で全てがまとめられるがヨーロッパでは大きく分けて 2 つの教師に分けられる。それは声楽の教師とコレペティの教師である。この 2 種類の教師はどちらも必要で，片方が足りなくても成立しない。

声楽教師は主に声の基礎を教え，体の使い方や声のバランス，姿勢なども教える。一方，コレペティはピアノ伴奏をしながら，主に作品の解説を行ったり，音楽作りを教えるのである。コレペティの教師は発声をはじめ声のことを教えてはいけないという暗黙のルールがあり，お互いの領域を尊重しつつ音楽教育が行われる。日本では音楽教師がそのどちらをも担っている。

木下はイタリアでのレッスン内容を日本において声楽レッスン受講者に伝授し訓練を行っている。とりわけ，レガート唱法に有効であり，反復して練習を行うフレーズを提示する。（楽譜 1 参照）

イタリア語では『い』の母音の響きが歌う際に最も重要である，と一般的に教えられるが，その「い」と「お」の響きを無理なく美しく歌うために，発声練習などで組み合わせて訓練する。ドレミの音階で 3 度，5 度，9 度と歌い，その後アルペッジョで 5 度，10 度，13 度と徐々に音域を広げていく。この時ベルカントの基本の響きは「明るく」「やわらく」「丸く」であり，意識して歌うのである。

ここで歌唱指導の際に気をつけなければならないことについて，これまで修得してきた中から，特に重要な 6 点を以下に示す。

1，音程が低い時に響きも一緒に意識する。

人それぞれであるが，中音域は出しやすいというのが一般的である。高音と低音は個人差があり，均等に出すことが困難になる。特に音程が低くなると歌声のポジションが落ちてしまい，その結果，音程が暗くなったり音程が低くなってしまう原因にもなる。

2，声になる瞬間の息のエネルギーを意識する。

ベルカントで歌う際，息を吸って吐く時に歌声のエネルギーを常にオン状態にしておかないと響きを均等に保って歌うことができなくなる。そのためには体の準備が大切である。

3，決して声を押さないように意識する。

声を押してしまうと，レガート唱法がなくなってしまう等あるが，最も気をつけないといけないことは，喉を痛めてしまう可能性があるということである。

4，柔らかい息で滑らかに次の音へ移行することを意識する。

ベルカントの基本であるできるだけ柔らかい音で歌うためには息もできるだけ硬くならないように気をつけなければいけない。しかし 2 で述べた声のエネルギーは失ってはいけないので，バランスは人によって違う。

5，下降音階の時，できるだけ響きが暗くならないように意識する。

上行音階の際，学習者は気をつけて上がっていくが，無事に高音を出したという気の緩みから下降音階ではエネルギー不足になり響きが落ちて，さらには音程が下がり息が持たないということになる恐れがある。

6，ブレスの時に重心が上がらないように意識する。

長い曲を歌ってくると，歌うことに必死になり，ブレスの取り方が雑になり，歌のパフォーマンスも落ちてしまう。できるだけ最後まで集中して歌い切れるだけのブレスを取りたい。

５，考察とまとめ

2020 年度から，小中高の新学習指導要領が順次全面実

施される。知識と技能だけでなく，思考力・判断力・表現力の育成を掲げ，「主体的・対話的で深い学び」による授業が進められる。改訂の理念に関わる指摘では，平成1917年12月中央教育審議会の答申「幼稚園，小学校，中学校，高等学校および特別支援学校の学習指導要領の改善および必要な方策について」において「感性を豊かに働かせる」こと，「多様な他者と協働しながら目的に応じた納得解を見出す」こと，「直面する変化を柔軟に受け止める」こと，「新たな価値を見出していくこと」，等のキーワードが読み取れる。音楽科教育におおいに関わる重点事項である。

新学習指導要領では，音楽科はどのような資質・能力を育成することができるか，音楽科授業における指導構想など，実践研究を深めていく必要がある。歌唱指導においても「音楽を愛好する心を育てる」について「どのように歌えるようになったか」だけではなく，「どのように歌おうとするか」という思考・判断の中で影響を与える「音楽的な見，考え方」についても考えが求められている。

イタリアのいにしえから引き継がれてきた自然な美しさを表現する歌唱指導法や創意工夫に学び，発達段階に応じ，正しく表現する方法である呼吸法や発声法など，基礎技能の教育方法の検証を深めてきた。一般にオペラだけでなく，様々な歌唱曲においてベル・カント唱法が最もそれにふさわしいものと考えられている。しかしながら，ごく自然に楽な息のエネルギーで歌い，力ずくでなく，身体の働きを自由にすることによって，その人のもつ本来の声のクオリテイと音楽を正しく表現していくという歌唱法は自分のものにするのにはかなりの期間，忍耐が必要である。声楽を専門的に学ぶ時期は，イタリアにおいて声変わりを終えた頃とされてきたが，修得に長い年月を要することから，小学校低学年より，成長に応じて，その基礎・基本を導入することは可能であり，それぞれの子供たちの可能性を広げていくことに繋がる。

木下の「声楽的美しい響きの伝え方」の中にあるように，新学習指導要領における「音楽経験と思考」について，学習者が疑問を抱き，発見を感じたりするきっかけがなければ，思考は始まらない。学習者が音や音楽に働きかけ，音楽経験の中で主体的に問題解決を図る場面で思考は働くのである。幼少期に様々な経験をすることにより，耳（聴覚）だけでなく目（視覚）や鼻（嗅覚）舌（味覚）そして触（触覚）を発達させ，その中から子供達は何かを感じ取り，どういう響きが美しいのか，また心地がいいのかということを自然に見つけ出していくプロセスの中で，イタリアのベル・カント唱法の一端を伝えることが重要であり，さらに美しい響きに対する興味・関心へと導くことができるのである。

心に響く曲や音色を聞くことにより「気持ちが盛り上がり高揚感を覚えた」など，人の心に大きく作用するといわれている。DNA修復や気持ちを落ち着かせたり，あるいは不安の感情を緩和させたり，リフレッシュ感が得られるなど，昨今，音楽療法の分野においても美しい音と人間の落ち着く周波数の関連性が考えられ，注目されているところである。教育活動の場において，「美しい響きの歌唱」に導く指導の確立は，大変意義あることである。木下は7年間にわたるイタリアやオーストリアでのベルカント唱法をはじめとした唱法の研究や演習において，基本的な導き方や配慮すべき事項を明示している。これらは，日本の初等科音楽教育における系統的な指導法の開発に活用していけるものである。

一方，瀧明は，ローマの幼・小・中学校の一体型学校であるピステッリ校での交流授業，研究会等において，イタリアのいにしえから引き継がれてきた歌唱指導法や創意工夫に学び，発達段階に応じ，正しく表現する方法である呼吸法や発声法など基礎技能の教育方法から検証を深めてきた。

今回は，イタリアの学校外教育との連携など，社会全体で組織的，計画的に行われている伝統文化継承の取り組みから，示唆を導き出すことができた。

ボローニャ市では，音楽教育を振興しており，「子供と音楽」「社会と音楽」をつなげることに取り組み，関係する人々が同じ使命をもって活動している。「音楽を身近に感じ味わうこと」を学校教育・社会教育の共通のねらいとしている。例えばオペラプロジェクトでは，日本では概ね，イベントの選択実施について，学校独自で進めるのが一般的であるが，保護者が選択する段階から，子どもにとって有益なものかを，パンフレットを熟読し子どものために判断し，費用も責任を持つ。多くの保護者が子どもに心豊かな体験をさせることを重要視している。家族で取り組みの様子などを話題にし，劇場での発表には，多くの保護者が訪れ，一体となって音楽を楽しむ機会となることも，このプロジェクトの良い面であると言える。子どもたちは，音楽専門家に学び，オペラ歌手とともに歌い，ステージ体験も行う。保護者は熱心に子どもたちの取り組みに寄り添い，仕上げのオペラ上演では子供の出演するオペラを鑑賞し感動を共有する。地域の専門機関・学校・保護者が連携してより良い教育を行うことを目指す場でもあるのだ。

こういった取り組みから，子どもたちの歌唱法をはじめとした音楽性が育まれ，イタリアの偉大な文化遺産はしっかり地域に根付き，子どもたちに引き継がれているのである。

これらの取り組みは音楽教育に留まっていない。「創造都市」の考え方は「芸術文化が持つ創造的なパワーを生かして社会の潜在力を引き出そう」であり，「社会の創造的な力を引き出す芸術文化政策への転換」を行ってきて

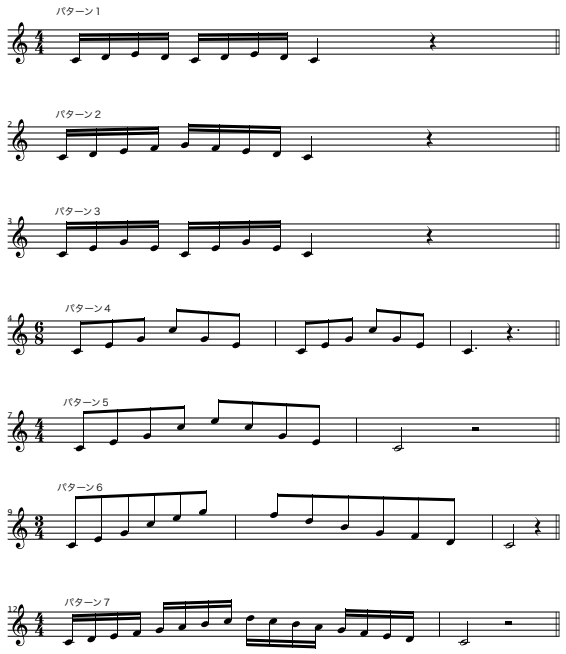
いるのである。[9)]

新学習指導要領が提示され，教育改革が進められている。グローバル化した 21 世紀には，情報化，テクノロジーの進歩が進めば進むほど，人間にしかできないことは何か，が重要になると言える。音楽は一生の友であり，知れば知るほど楽しみが深くなり，生涯学習につながっていくものである。

音楽教育は今後，更新とその道筋をどのように構築するか，新しい学力観に対して音楽教育の在り方を，イタリアの学校外教育との連携等にも示唆を得ながら，音楽科改善の視点から，さらなる充実をめざさねばと考える。

（楽譜１）

発声練習



引用・参考文献

1) ・瀧明知恵子「イタリアの学校音楽科教育に学ぶ　～歌唱活動に注目して～教育フォーラム 56 号特集＜アクティブラーニングとは何か＞金子書房　2015
・瀧明知恵子「イタリアの道徳教育と学習者の評価～イタリアの学校教育実地調査から～」指導と評価 2015　図書文化
・瀧明知恵子「イタリアの学校音楽科教育に学ぶⅡ～創造性・主体性の育みを視点として～」教育フォーラム 58 号特集＜主体的能動的な学習―アクティブラーニングの精神を生かす＞金子書房　2016

2) Giobanni G. I molti tempi, luoghi, attori della formazione: un'analisi del policentrismo a partire dell'offerta. In Morgagni E. e Russo A. (a cura di), L'educazione in sociologia. Testi scelti, Clueb, Bologna, pp. 393-410, 1997.

3) 小学校向け「公教育プログラム」1974 年，1985 年

4) 「幼児教育と初等教育のための国のカリキュラム指針」2012 年 9 月版教育省

5) 同上

6) 「Scuola In Canto」 I nostri progetti (Scuola in Canto Ars In Canto In Cantando) 2014

7) Cecilia Gobbi, Nunzia Nigro (DI GEORGES BIZET) 「CARMEN」 CURCI (Cecilia GOBBI, TEATRO DELL OPERA DL ROMA) 2010

8) 『和合治久』監修　ACOON HIBINO「もやもやがスーッと消える 528Hz」CD ブック」©却2017　中央精版印刷株式会社
和合治久「心と体が安らぐ周波数「528Hz」CD ブック　2013　イーストプレス　中央精版印刷株式会社

9) 佐々木雅幸「創造都市の公共政策　―2000 年のボローニャ―」立命館大学　政策科学８－３，Feb. 2001
・佐々木雅幸・総合研究開発機構編『創造都市への展望-都市の文化政策とまちづくり』学芸出版社　2007
・佐々木雅幸「創造都市への挑戦―産業と文化の息づく街へ」岩波現代文庫 2012
・フレデリック・フースラー，イヴォンヌ・ロッド＝マーリング＝著「Singen」　須永義雄，大熊文子＝訳 1991　音楽之友社
・コーネリウス・L.リード「ベル・カント唱法―その原理と実践」渡部 東吾（翻訳）音楽之友社 1986
・高橋純「歌い手のフォルマントについての考察」京都市立芸術大学音楽学部・大学院研究紀要
HLMONIA N0.47 2016
・John Warrack and Ewan West, "The Oxford Dictionary of Opera", Oxford Univ. Press (ISBN 0-1986-9164-5)
・外務省ウェブサイト
（http://www.mofa.go.jp/mofaj/area/italy/data.html）
（更新日：2016 年 11 月 9 日）
・外務省　諸外国・地域の学校情報　国・地域の詳細情報（2018.1 更新情報）
・文部科学省『小学校学習指導要領（平成 29 年告示）解説　音楽編』2018